ユリシーズ第１０挿話の考察

内容
・地図で見る第10挿話
・２つの支配(政治と宗教)とダブリン市民
・ダドリー総督とサイモン・ディーダラスのお辞儀
・モンタージュ的手法
・その他気になったこと

*あくまで素人の考察なので誤りもあるかと思いますが・・アマチュアの特権ということでご容赦ください

2021/2/21 ぬしろかずや

地図で見る第10挿話
1904年6月16日
14:55-16:00
ダブリン市

2つの支配(政治と宗教)とダブリン市民

物語：第１断章(コンミー:ピンク線)と第19断章(ダドリー：赤線)
⇨宗教と政治に挟まれる計17断章のダブリン市民

地理：リフィ川の北(コンミー)と南(ダドリー)
⇨ダブリンの南と北から挟まれるダブリン市民

ダドリー総督とそれを見る市民

ダドリー総督とサイモン・ディーダラスのお辞儀

オーモンド船寄通りでサイモン・ディダラス氏が共同便所から副執政官の事務所へ向かおうとして、通りの中ほどでつと立ち止まり、帽子をとって低く下ろした。
閣下は慈悲深くもディダラス氏の挨拶に応じた。
(柳瀬訳、第10挿話、P425)

帽子をとって総督に敬意を払うような描写

オーモンド 海岸では、公衆便所を出て副執政官の事務所へ行こうとしていたミスタ・サイモン・ディーダラスが、通りの真ん中で立ち止まり、深々とおじぎをした。
総督閣下はミスタ・ディーダラスの挨拶にゆっくりと会釈した。
(丸谷訳(文庫版)、第10挿話、P178)

帽子をとっていないものの総督に敬意を払うような描写

On Ormond quay Mr. Simon Dedalus, steering his way from the greenhouse for the subsheriff's office, stood still in midstreet and brought his hat low.
His Excellency graciously returned Mr. Dedalus greeting.
(Ulysses(English Edition)、kindle版, No.3487/10388)

brought his hat low=帽子を低くする

ダドリー総督とサイモン・ディーダラスのお辞儀

brought his hat low=帽子を低くする

この表現だと頭を垂れただけで、帽子は外していない？
＝(頭を垂れたことで帽子の位置が下がっただけ？/取るならTake offという表現を使う？)
＊当日、英語表現にお詳しい方教えて下さい

サイモンは帽子はとったのかとっていないのか？
とっていないならサイモンはただ頭を下げただけかも。。。

ズボンのチャックを
気にしてか・・・

すなわち、公衆便所から出て(ズボンのチャックを上げる際に？)下を向いたサイモンが、
ダドリー総督には自分にお辞儀をしているように見えたか？
⇨ダドリー総督の周囲(アイルランド市民)からの人望がさほどないことを如実で表した瞬間

・・・だとすると丸谷訳の方が忠実な気がする

ここの訳、状況はダドリー総督ひいてはイギリス自治を考える上で非常に重要であり、
丸谷訳ならびに上記の解釈が妥当ならば、ダドリーの認識の齟齬**(＝信頼できない語り手)**
という点で非常に面白いが。。

モンタージュ*的手法

ーまるでカメラのアングルが切り替わるかのように途中で場面が変わる
(文章はP381.最終行)

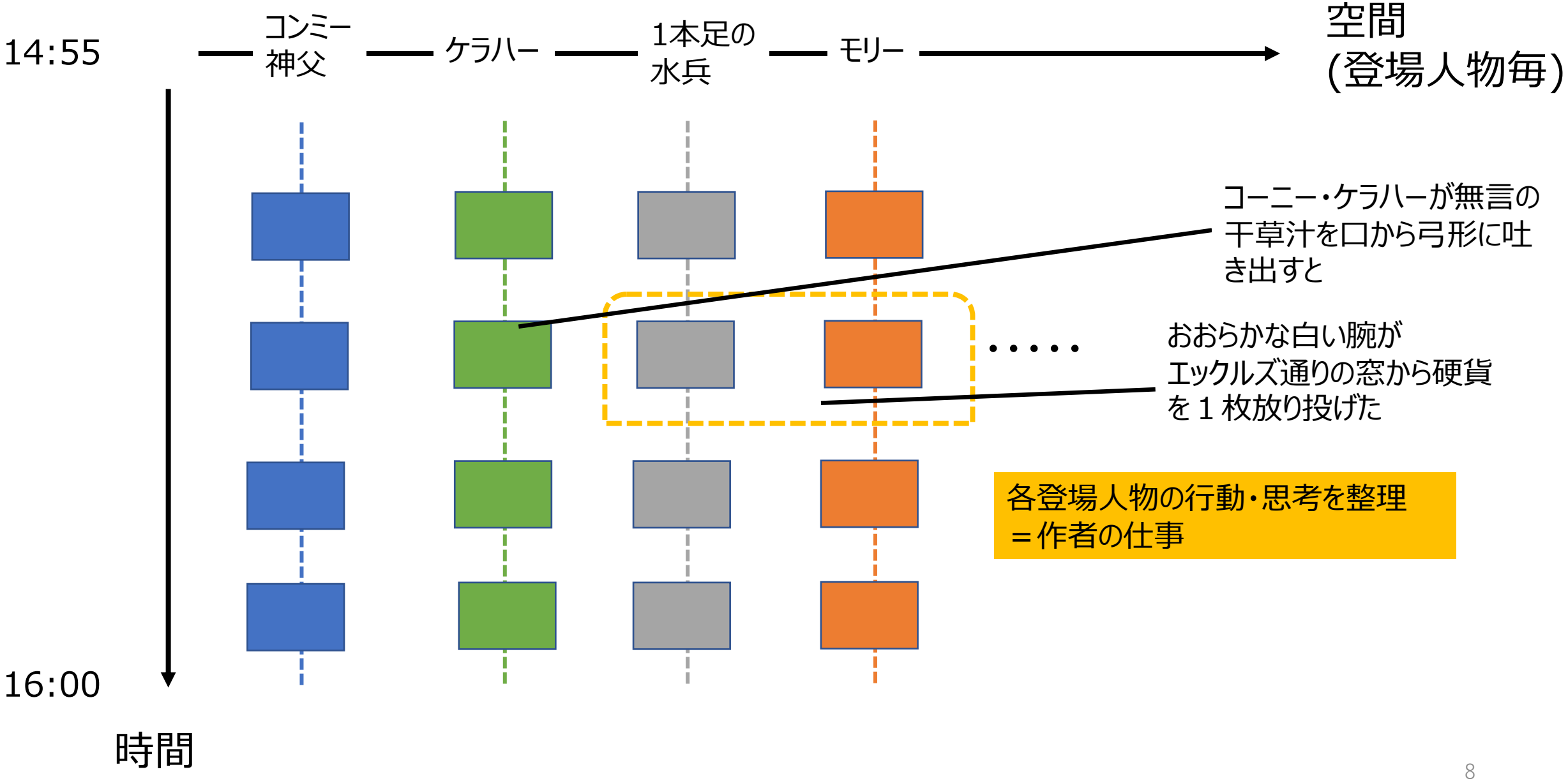
*モンタージュ：
映画用語で視点の異なる複数のカットを
組み合わせる技法のこと(wikipediaより)

おおらかな白い腕が
エックルズ通りの窓から硬貨
を1枚放り投げた

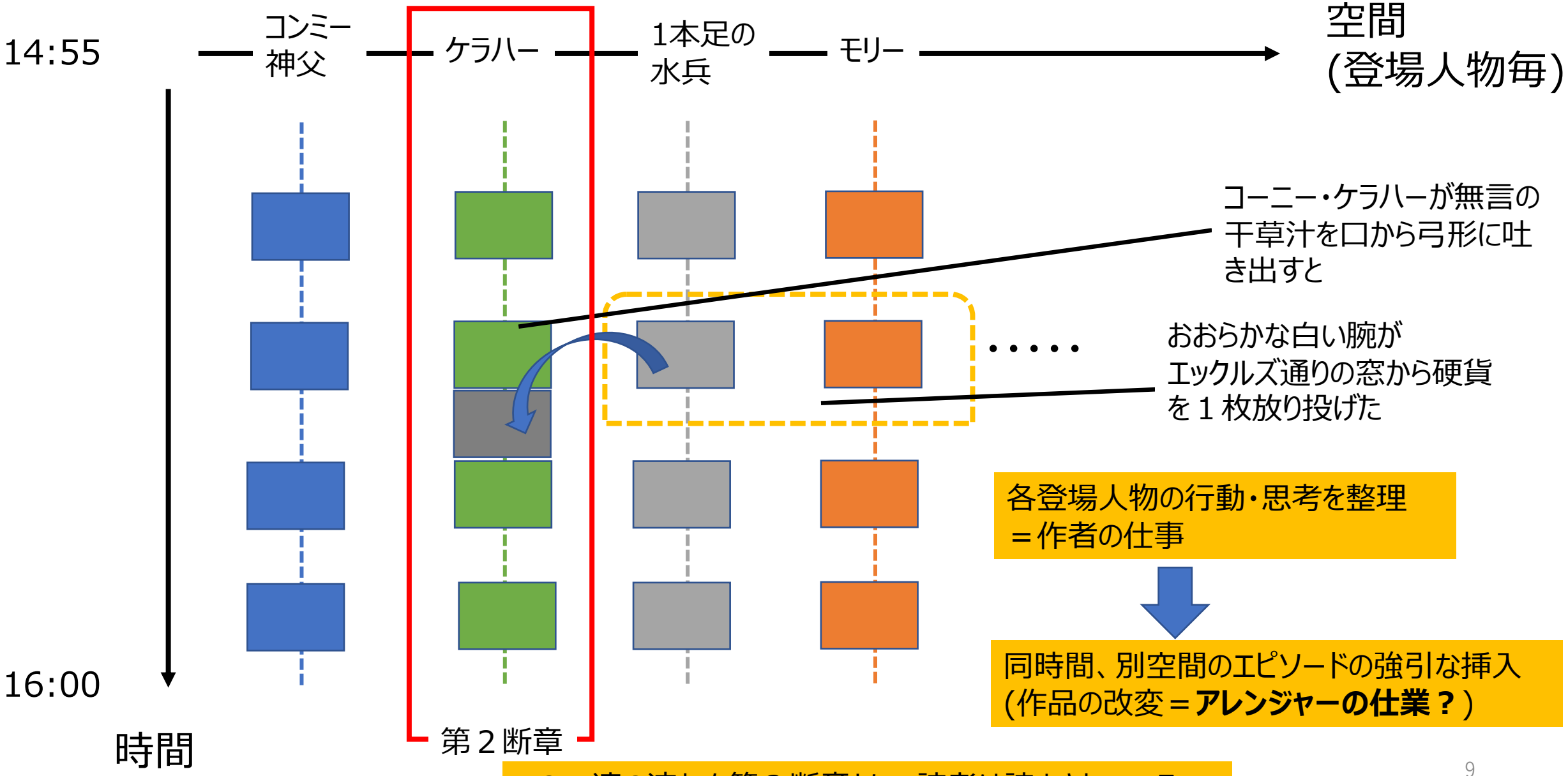
コーニー・ケラハーが無言の
干草汁を口から弓形に吐
き出すと

強引、唐突な視点の切り替え
この二つの登場人物、シーンに繋がりは見出せな
いが。。。

モンタージュ的手法
-登場人物の行動の模式図-



モンタージュ的手法
-突然のアレンジャーの介入-



各登場人物の行動・思考を整理
＝作者の仕事

同時間、別空間のエピソードの強引な挿入
(作品の改変＝**アレンジャーの仕業？**)

この一連の流れを第２断章として読者は読まされている

エイゼンシュティンに見るモンタージュ　映画　戦艦ポチュムキン(1925)に見るモンタージュ(画像はyoutubeより)

銃を構える兵士

逃げる人々

息子を抱える父親

抗議する人々

息子を抱える父親

行進する兵士

兵士、人々、父親の場面とカットを切り替えることにより単独の場面以上に権力側の無慈悲/不条理さを想起
＝そのような印象を持つのは視聴者が各カット(断章)結びつけ自分の頭の中で再結合するため

モンタージュ的手法

-エピソードを再結合し新たな意味を見出すのは読者-

これまでブルームまたはスティーブンの視点で物語が進行してきたが、
本挿話では異なる登場人物、視点からなる断章に別れている。
それらのエピソードを再結合し、意味を見出すのは読者　１＋１＝３

このように異なる事象を結合して第３の意味を見出すことを弁証法的モンタージュと呼ぶとのこと
(ヘーゲルの弁証法にある止揚：矛盾する二つの要素を対立、闘争の過程を通じて発展的に統一することの意から)

おおらかな白い腕が
エックルズ通りの窓から
硬貨を１枚放り投げた

＋

エックルズ通り7番地
ブルームの家(P100/第４挿話)

→ **白い腕の正体はモリー**

おおらかな白い腕が
エックルズ通りの窓から
硬貨を１枚放り投げた

＋

コンミー神父は陽光の中、祝福を与えた。
財布の中身が１クラウンだったから。
(P373)

→ **コンミー神父の偽善**

おおらかな**白い腕**が
エックルズ通りの窓から
硬貨を１枚放り投げた

＋

黒い背中の人影がマーチャンツ・アーチで露天の荷車に並ぶ本を漁っていた
(P386)

→ **白(モリー)と黒(ブルーム)の対比＝すれ違う夫婦生活**

むっちりとしたむき出しのおおらかな腕が日差しの中、ぱっと見えて、**白いペチンコート胴着**とぴんと貼った**シュミーズ紐**から差し出された。
(P383)

＋

一夫の与えるドル札の全てはほうぼうの店で素敵なガウンやフリル付きの高価な**下着**に使い果たした。
彼のために！ラウールのために！
(P399)

→ **下着姿でボイランを待つモリー**

その他気になったこと

・第9挿話からの第10挿話の意義
　以後、第11挿話からinitial styleはなくなるがそれの導入か。
第10挿話は一つ一つの断章はinitial styleの表現であるが、鳥瞰図的なモンタージュな視点、アレンジャーによる強引なエピソードの挿入は斬新であり、まさしくinitial styleと新しい文体を繋ぐ挿話であるか

・第10挿話とダブリン市民(ダブリナーズ)の違い
　初見では、第１０挿話はダブリナーズの焼き直しに思えたが、1904年6月16日の14:55-16:00に限定したこと、鳥瞰図的な視点、エピソードの強引な挿入(アレンジャーの介入)といった点が大きく異なる。
(個人的にはダブリナーズは短編であるため、各エピソード間にあまり繋がりがないことに物足りなさを感じましが)

・一十年だな（中略）十年後には何か書くだろう。(P.421 マリガンがスティーブンを指して)
1904年6月16日から10年後の1914年6月にジョイスは『ダブリン市民』を出版。
ダブリン市民が活躍する第10挿話との関連性を意識してしまう

・第18断章ディグナム坊やの語り
ユリシーズ中唯一の子どもの独白。若き芸術家の肖像の前半部(スティーブンの幼年期の独白)に近いか

・映画とジョイス
ジョイスはモンタージュ技法の大家であるソ連の映画監督のエイゼンシュティンに影響を与えたとされるが、
そのジョイスもモンタージュ技法を発明したアメリカの映画監督D.W.グリフィスの影響を受けたとされる

感想：南谷さんの以前の資料に乗せて

『ユリシーズ』を読むための6つの方法

(1) 意味と「？」を集める蜜蜂になる

なぜ？この文章がここで挿入されるのか。。

(2) 「小さな一つ」に情熱を注ぐ

サイモン・ディーダラスのお辞儀に注ぐ情熱

(3) 寄り道をしながら誰かと読む

ジョイスを通じて学ぶ映画のモンタージュ手法の歴史

(4) 一介の生活者として読む

モンタージュの1＋1＝3は
特許発明の考え方に似ている！

(5) ダブリン行きを楽しみにする

Google mapとにらめっこしながら各登場人物の
足跡に想いを馳せ、ダブリンを身近に

(6) すべてが繋がっている驚異に出遭う

ダドリーの馬車で繋がる登場人物達

第10挿話はユリシーズの6つの魅力（特にダブリン行きを楽しみにする５番目が）詰まった挿話